

授業で教える英語ディベート

日本高校生パーラメンタリーディベート連盟 理事 小林良裕

2020年4月19日版

- ・全11回 × 各回 15分～20分 程度
-

◆ 【11回の構成】

1) ディベート指導の背景知識[1]

- ・即興型と準備型
- ・日本におけるディベート指導の小史
- ・中高大の活動の現状

2) ディベート指導の背景知識[2]

- ・即興と 準備型の違い：議論の扱いに関して

3) ディベート指導の類型

- ・日本の大学の部活動での指導
- ・学校のカリキュラム内での指導の3類型

4) 具体的に教える内容 ① 議論の立て方

5) 具体的に教える内容 ② 反論の仕方

6) 具体的に教える内容 ③ 質問の仕方

- ・fact / opinion を見分ける
- ・POI というものについて

7) 小グループでの活動

- ・立論・質問・要約・反論の1人1役

8) 試合をさせる・

- ・聞き方の指導
- ・勝敗の決め方

9) ディベートと他の活動を組み合わせる

- ・Reading 教材のまとめとして
- ・Writing 活動のまとめとして

10) 「4技能検定」&入試の指導と組み合わせる

11) 部活動での指導

- ・事例報告
- ・大会の種類

◆ 動画内で引用・言及した動画 / website 一覧

- A Few Goodmen (5/8) Movie Clip – I didn't dismiss you (1992) HD

<https://www.youtube.com/watch?v=PjJzOpe9xEg>

- College debate gone Wild

<https://www.youtube.com/watch?v=Ui8XXE1friM>

- Brown tells Cameron: “You used to be the future”

<https://www.youtube.com/watch?v=CBjnSsaIu70>

- Mixidea: online debate

<https://mixidea.org/>

【参考】国際大会の試合の動画を観て学ぶ

一人でもできるディベートの練習方法として、国際大会の試合の動画を見ることをおすすめします。国際大会の試合の動画は、インターネット上で多く見つけることができます。

【検索方法】

ディベートの大会では、予選、OF (Oct Final)、QF (Quarter Final)、SF (Semi Final)、GF(Grand Final : 決勝)のように試合が行われます。大抵の音源は、大会名・年（例：WUDC 2009）あるいは大会名・年・試合（例：WUDC 2009 GF）のように検索すれば、YouTube 等の動画サイトで見つけることができます。

【使用方法】

音源の使い方は人それぞれですが、ただ聞き流すだけでは意味がありません。表現を真似してみたり、なぜその議論をしているのかを考えてみたりするとよいでしょう。そのため複数の音源に手を出すのではなく、自分が気に入ったものを繰り返し聴くことをお勧めします。

【特におすすめの試合】

- ・ WUDC2009 GF (THBT ban abortion at all stages of pregnancy)
<https://www.youtube.com/watch?v=VMQTtUU4LbI>
- ・ WUDC2010 GF (THBT the media should show the full horror of war)
https://www.youtube.com/watch?time_continue=2&v=O1nG3CUo6vk
- ・ WUDC2012 GF (TH supports nationalism)
<https://www.youtube.com/watch?v=adPe9h5w6Kk>
- ・ WUDC2016 GF (THBT the world's poor would be justified in pursuing complete Marxist revolution.) <https://www.youtube.com/watch?v=tngaDNSICpU>
- ・ EUDC2009 GF (THW ban Nazi and Soviet symbols)
<https://www.youtube.com/watch?v=ExaP0ZBYA3s>
- ・ EUDC2011 GF (THBT the state should pay reparations to women)
<https://www.youtube.com/watch?v=DNiwqi0qnDU>
- ・ WSDC2010 GF (THBT Governments should never bail out big companies)
<https://www.youtube.com/watch?v=3ZvhB9BozTs>

【資料 1】 日本における英語ディベート小史

(1) 近代以前

日本にディベートという形式の言語活動が初めて導入されたのは、16世紀にキリスト教の宣教師によってだとされています。修道士が教養として行う教義に関する問答として伝えられました (Chieslik 1965, qtd in Inoue 1994: 60)。しかしながら、キリスト教への弾圧もあり、日本に根付くことはありませんでした。日本におけるディベートの歴史は、明治以前に遡って語られることが、殆どありません。

確かに、日本にもパブリックスピーチの伝統はあり、僧侶の説法・講話などを挙げることができます。その一方で、議論によって真実を追い求め、より良い意思決定を目指す言語活動、即ち討論の作法が体系化されることはありませんでした。

この理由としては、私見では日本において歴史的に政策決定が上位下達で行われていたことが挙げられます。例えば、雄弁術が発達した古代ローマ・ギリシャにおいては、国家の意思決定は代表者の演説と、市民や議員による投票によって為されました。それ故に、言葉によって聴衆の説得を試みる技術が洗練されました。日本においては、単純化すれば、主に血縁関係と武力の後ろ盾に基づいて、少数による政策決定が行われてきました。この様に、一般市民を取り込んで意思決定を行う政治体制が存在しなかったことが、日本にディベートに類する言語活動が育まれなかつた原因である様に思えます。

(2) 明治における導入から戦後の普及まで

この政治体制の導入が日本で試みられたのが、明治時代でした。当時の政府関係者が、新しい政治の枠組みを作るにあたり、欧米の議会に視察に訪れた記録があります。これを受けて、西欧のパブリックスピーチ、そしてディベートを日本に取り入れる試みがいくつか為されました。その中で代表的な例として、福澤諭吉らの取り組みが挙げられます。福澤らは演説用の講堂を造り、「會議辯（会議弁）」という日本語のパブリックスピーチのマニュアルを 1873 年に作成しました。民権運動家の努力もあり、各地にて演説会が開かれ、広義での討論会も開かれて行きました。

日本語の演説会が開催される様になった一方で、それでは形式・ルールの整った、本テキストで導入が試みられるような英語ディベートは普及し始めたのでしょうか。明治時代の日本語の演説教本、そして英語スピーキングの教科書を分析した小林 (2006)によれば、当時の演説の教科書は「エロキューションナリー・リーディング」という身振り手振りや発声方法に関する海外のマニュアルを翻訳したものが大半で、英語ディベートをする上で参考にできるような、スピーチのフォーマットに関する教本は皆無です。また、国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」に収められた明治期の英語スピーキング教科書を全て確認したところ、“debate”という章を持つ出版物はあった物の、トピックが書かれているだけであり、いかなる手順で議論しあうのかまで述べた物は見当たりません。

その一方で、例えば Ohno (2002) で明らかにされた様に、大正時代前後にいくつかの英語会によってモデル・ディベートが定期的に行われた詳細な記録が残っています。恐らくは、斎藤 (2000) によって例示された新渡戸稻造や岡倉天心など、当時の英語の達人の実践を通じて小規模ながらも英語スピーチ、あるいはディベートのコミュニティが作られていたのではと推察されます。

この様にして日本に根付き始めたパブリック・スピーキング、並びに英語ディベートは第 2 次大戦後、さらなる民主主義の流れの中で注目を浴びることになります。朝日新聞社が主催した大会により、いわゆる「アカデミック・ディベート」という英語ディベート形式が全国に広まりました。これを皮切りに、各地の大学の English Speaking Society が地方大会そして全国大会を運営し始めました (Inoue, 1994)。アカデミック・ディベート普及を目指した幾つもの団体も発足し、幾らかの中学校・高等学校において実践が試みられ始めるなど、教育現場において英語ディベートがより身近になりました。

(3) パーラメンタリーディベートの日本への導入

日本の英語ディベートに新しい流れが起ったのが、1990 年代です。この 10 年を経て、海外のディベーターとの繋がりがより密接になり、大学生ディベーターの目標が国内大会における優勝から、国際大会において成績を残す事へと変化しました。新しい流れは、パーラメンタリーディベートの日本への導入と共に起こりました。

野内 (2001a) に拠れば、日本におけるパーラメンタリーディベートの嚆矢は 2 つあります。1 つ目は、関東学生英語会連盟 (KUEL) が 1990 年 8 月に招いた、プリンストン大学のディベーターによるレクチャーセンターとされています。これをきっかけとして、関東学生英語会連盟主催のワークショップが、日本パーラメンタリーディベート連盟 (JPDU) の発足する 1990 年代後半まで開かれて行きました。また、この一行が伝えたスタイルである、北米形式 (North American Style) が、現在まで日本ではパーラメンタリーディベートの主要なスタイルとして定着しています。

2 つ目は、1991 年 10 月の ICU Debating Society の創部です。設立したのは、日本人の学生ではなく、交換留学で来日したヨーロッパのディベートチャンピオンとされています。発足当初は留学生を中心としていた部も、徐々に日本人学生の参加者を増やし、1994 年には大学公認団体として認可を受けるに至りました。ICU Debating Society は 1992 年より ICU トーナメントという海外からのチームも招いた大会を開き、2007 年 3 月にはその第 16 回目を開催するに至っています。また、日本語で書かれた初めてのパーラメンタリーディベートに関する概説書を出版するなど、日本国内にて指導的な役割を果たしてきました (大和田 他, 1999)。

(4) JPDU 発足から国際大会での活躍

日本の大学生レベルにおいて、パーラメンタリーディベートが定着したことを印象付ける出来事として、1998 年の日本パーラメンタリーディベート連盟 (Japan Parliamentary Debate

Union, JPDU)の発足があります。関東学生英語会連盟から発展的に分離したJPDUは、主に各種大会・練習会の開催、ディベート合宿の企画・運営、そして国際大会での日本代表としての意思決定を担っています。また近年は、オーストラリア大使館の支援の下、同国より世界トップレベルのディベーターをコーチとして招聘し、日本人ディベーターの派遣も行っています。

JPDUに加盟する学生団体は2005年現在で37を数え、競技人口も増加すると主に、国際大会への日本人の積極的な参加が近年特に顕著になりました。また、2005年に東京大学英語ディベート部が、オーストラリア・アジア大会にて日本人チームとして初めて国際大会にてESL(英語を第2言語とする者用)本選に進出したことを皮切りに、2008年度世界大会では慶應大学のチームがEFL(英語を外国語として使用する者)部門で優勝するなど、日本人チームがコンスタントに国際大会で結果を残せる様になりました。

(5) 英語ディベートの今後

本テキストで導入を試みているパーラメンタリーディベートに関して言えば、ここ数年の傾向として、競技人口の裾野が大学生以外にも広がっていることがあります。数年前より、社会人のみを対象とした大会が、日本英語連盟(English Speaking Union of Japan, ESUJ)によって毎年6月に開催されています。また、高校生世界大会に日本の高校からも出場することになり、パーラメンタリーディベートを練習する中高生が少しずつ現れ始めています。この傾向が続き、果たして英語ディベートが大学生の部活動に留まらず、より幅広い社会層によって受け入れられる競技と認められるかどうかが、今後の課題になるでしょう。

References

- Inoue, N. (1994). *Ways of Debating in Japan: Academic Debate in English Speaking Societies*. Unpublished Ph.D. Dissertation submitted to University of Hawaii.
- Ohno, H. (2002). English oratory in late Meiji period Japan: Debating at Hitotsubashi. *Annual Review of English Language Education in Japan*, vol.13. pp.229-238.

大和田貴仁・土淵庄太郎・石田京子・岡史子 (1999). 「Essence of Parliamentary Debate」 第2版. 東京 : ICU Debating Society.

小林良裕. (2006). 日本における英語ディベートの発祥：明治期における伝来の可能性. 東京大学大学院総合文化研究科 夏季集中講義「英語教育史」学期末レポート

斎藤兆史 (2000). 「英語達人列伝 あっぱれ日本人の英語」 東京 : 中央公論社.

野内光二 (2001a). 日本のパーラメンタリーディベート活動－過去、現在、未来－.
<http://members.at.infoseek.co.jp/parli/basics/japan1.html>

野内光二 (2001b). パーラメンタリーディベートとは?
<http://members.at.infoseek.co.jp/parli/basics/parli.html>